

身体運動文化学会第 22 回大会
2017 International Forum on Budo World
Concerning Educational Aspect of Budo
— 武道の教育力 —



2017年12月9日（土）～10日（日）

筑波大学 筑波キャンパス

主催：身体運動文化学会

共催：筑波大学・武道ワールド

目 次

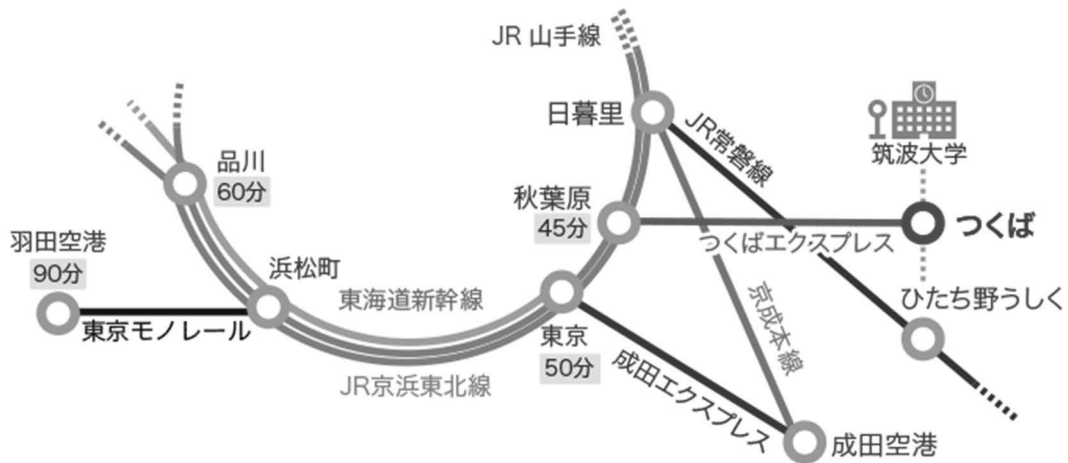
1. 会場案内	1
2. 会長挨拶 二杉 茂 (神戸学院大学)	4
3. スケジュール	5
4. 記念講演 「身体運動を通して人を育てる」	6
萩原武久 氏	
筑波大学名誉教授・つくば市理事	
(株)フットボールクラブ水戸ホーリーホック顧問	
5. シンポジウム	9
Budo World Project	
2017 International Forum on Budo World:	
Concerning Educational Aspect of Budo ー武道の教育力ー	
趣旨説明 酒井利信 (筑波大学)	
① 「身体を通して心を変える」 前林清和 (神戸学院大学)	
② 「欧州における教育としての武道」 ミハリク・フノール	
(ハンガリー剣道・居合道・杖道連盟)	
③ 「武道教育における現場を知るー調査研究報告ー 大石純子 (筑波大学)	
指定討論・話題提供	
桑森真介 (日本武道学会理事長、明治大学)	
サボー・バラージュ (エトベシュ・ローランド大学、ハンガリー)	
阿部哲史 (Forum for Budo Culture (NPO), Hungary)	
林 伯修 (台湾師範大学、台湾)	
川本千夏 (ルーマニア・アメリカ大学、ルーマニア)	
石窪真一 (都城東高等学校)	
6. 一般研究発表	17

【会場案内】

会場：筑波大学 筑波キャンパス 体育・芸術エリア 5C棟 216室

住所：〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1

<交通アクセス>



《つくばへのアクセス》

●つくばエクスプレス

つくばエクスプレス秋葉原駅から快速 45分、「つくば駅」下車+バス

●JR 常磐線 JR 常磐線普通列車利用+バスまたはタクシー

・ ひたち野うしく駅

東口1乗り場から「筑波大学中央」行バスで 40-50分、東口からタクシーで 20-25分

・ 荒川沖駅

西口4乗り場から「筑波大学中央」行バスで 30-40分、西口からタクシーで 20-25分

・ 土浦駅

西口3乗り場から「筑波大学中央」行バスで 35-40分、西口からタクシーで 15-20分

●高速バス

東京駅八重洲南口から高速バス乗り場(2番バス停)「筑波大学」行きバス (約 75分)

※「つくばセンター」止まり (約 65分) 利用の場合の路線バスの乗り継ぎ方法は、

「つくばセンターから筑波大学へ」をご覧ください。

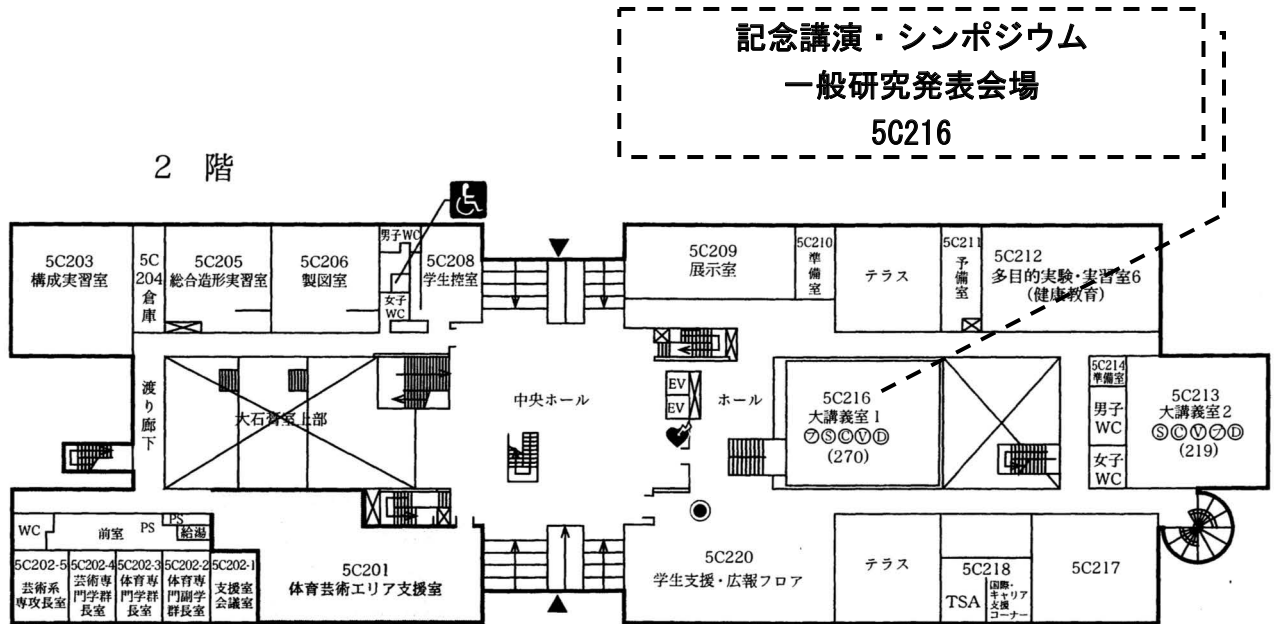
《つくばセンターから筑波大学へ》

「つくばセンター」より筑波大学循環バス (右回り、左回り) に乗車、あるいは「筑波大学中央」行バスに乗車で、「筑波大学西」または「合宿所」で下車

キャンパスマップ 南地区



5C棟2階 案内図



【大会参加費のご案内】

一般会員：3000円

当日会員：1000円

学生：無料

※ 12月9日(土)の記念講演及びシンポジウムへの参加は無料です。

あいさつ



会長 二杉 茂 (神戸学院大学)

2020年の東京オリンピック開催まであと3年を切り、会場や周辺設備の準備、メダル獲得への競技力の向上など、「する」「みる」「ささえる」の三側面それぞれにおいて、スポーツへの関心がたいへん高まっていることは喜ばしいことです。この機運が、オリンピックという一大イベントが終わった後も消失することなく継続され、スポーツ文化、さらに広い意味での身体運動文化のもたらす恩恵を人々が末永く享受していくことが望まれます。

私達、身体運動文化学会も今回で22回の大会開催を迎えることになりました。会の設立当初から、西欧・近代的なスポーツばかりでなく、民族固有の世界中で多様な形態で存在している身体運動文化に広く目を向け、そのありようと将来に向けての豊かな人間文化としての継承について、学際的に探求してまいりました。

今回の大会では、「武道の教育力」をテーマに掲げ、わが国固有の身体運動文化である「武道」について多角的にディスカッションが進められます。記念講演では、筑波大学名誉教授でつくば市理事、水戸ホーリーホック顧問の萩原武久先生をお迎えし、「身体運動を通して人を育てる」と題してご講演をいただきます。続くシンポジウムでは、酒井利信先生（筑波大学）をコーディネーターとし、前林清和先生（神戸学院大学）、ミハリク・フノール氏（ハンガリー剣道連盟）、大石純子先生（筑波大学）をシンポジストに、桑森真介先生（明治大学）、サボー・バラージュ先生（エトヴォシ・ローランド大学・ハンガリー）、阿部哲史先生（ハンガリー剣道連盟）、林伯修先生（臺灣師範大学）、川本千夏先生（ルーマニア・アメリカ大学）を指定討論者にお迎えし、教育としての武道、さらには、身体を通しての人間形成について、幅広く討論が行われます。

最後になりましたが、本学会大会を開催するにあたり、多大なるご協力、ご支援を賜ります筑波大学の関係各位に感謝の意を表すとともに、学会大会が成功裡に終わることができるよう関係各位にお願い申し上げます。

【スケジュール】

〈12月9日（土）〉

11:30～ 常任理事会・理事会

12:00～ 受付

13:00～ 開会・会長挨拶

13:15～14:15 記念講演

「身体運動をとおして人を育てる」

萩原武久先生 筑波大学名誉教授、つくば市理事

(株)フットボールクラブ水戸ホーリーホック顧問

14:30～17:00 シンポジウム

Budo World Project

2017 International Forum on Budo World: Concerning Educational Aspect of Budo

—武道の教育力—

趣旨説明 酒井利信（コーディネーター）

・身体を通して心を変える 前林清和（神戸学院大学）

・欧州における教育としての武道 ミハリク・フノール

（ハンガリー剣道・居合道・杖道連盟）

・武道教育における現場を知る

—調査研究報告— 大石純子（筑波大学）

指定討論者：桑森真介（日本武道学会理事長、明治大学）

サボー・バラージュ（エトベシュ・ローランド大学、ハンガリー）

阿部哲史（Forum for Budo Culture (NPO), Hungary）

林 伯修（台湾師範大学、台湾）

川本千夏（ルーマニア・アメリカ大学、ルーマニア）

話題提供：石窪真一（都城東高等学校）

（This symposium is supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP16H03223.

本シンポジウムは JSPS 科研費 JP16H03223 の助成による事業の一環です。）

18:00～ 懇親会

〈12月10日（日）〉

9:00～ 一般研究発表（発表15分、質疑応答5分）

12:00～ 総会（奨励賞表彰式）

【記念講演】

身体運動を通して人を育てる

萩原武久氏

(筑波大学名誉教授、つくば市理事、(株)フットボールクラブ水戸ホーリーホック顧問)



プロフィール

1944年10月21日生。東京教育大学体育学部健康教育学科卒業。

1979年1月に筑波大学体育科学系の講師に就任。以降、筑波大学人間総合科学研究科教授、筑波大学体育センター長（兼任）を歴任。2008年3月に筑波大学定年退職し、同年4月に筑波大学名誉教授。2008年6月からは、(株)フットボールクラブ水戸ホーリーホック強化・育成部長、2009年4月～2015年2月には、(株)フットボールクラブ水戸ホーリーホック取締役GMを歴任。現在は、(株)フットボールクラブ水戸ホーリーホック顧問。つくば市スポーツ振興担当理事。社会活動として、茨城県体育協会・競技力向上委員会委員長、つくば市スポーツ審議会委員、つくば市スポーツ審議会会長。つくば市体育協会会長、茨城県体育協会評議員としても活動。

筑波大学蹴球部監督歴任、日本サッカー協会公認S級ライセンス、日本体育協会公認 A 級コーチ。

身体運動を通して人を育てる

人は動く使命をもって誕生している

人の身体は誕生時から動くことができる仕組みをもって生まれてきている。

人体の骨格、骨の数は誕生時には約305個であるが、成長するにつれ小さな骨が結合するために成人では約206個だと言われている。

また、その骨格を操る関節は約260にも及ぶ。手の掌をみても、片手で27の関節があり様々な動きに対応している。

また、人体には37兆の細胞が存在し生命や成長を司っている。

その中でも特記すべきは、120億の神経細胞（ニューロン）がつくる神経回路網の繋がりである。この神経回路網は、誕生時に活動をする準備は整っているスタンバイ状態であるが、これらを機能させ神経回路を網のように繋げるためには刺激が必要である。

運動神経がいいとか、運動感覚に優れていると言われるが、それは運動に関与する神経回路網の繋がりが多いからに外ならない。人は、生まれながらにして、繊細に、緻密に動ける身体を有している。

然るに、本会の標榜する高度の身体運動とは、繊細に、緻密に運動できる身体を意味し、その究極がスポーツであると認識し、高度の身体運動=スポーツが人づくりにどのように関わっているのかを論じていきたい。

キックオフ

Anpfiff ins Leben!

これはバーデン・ヴュルテンベルク州ジンスハイム村にある1899年設立のサッカークラブ、ホップェン・ハイムの青少年育成センターの入口に立つ看板の文字である。

Anpfiff はドイツ語でサッカーの「キックオフ」を、Leben は人生の意味を持つ。

Anpfiff ins Leben, この場所は青少年にとって「人生にキックオフ」をする大切な場所であることを一目で印象づけている。

その証拠に、Sport/Schule/Beruf/Soziales の4つの言葉がそれを端的に物語っている。

Sport サッカーの青少年育成センターだから、スポーツとサッカーの教育は当然のことである。

Schule は学校の意味もあるが、学問、勉強の意味も併せ持っている。

Beruf 職業、仕事のことである。日本では選手活動を終えた後の職業として、セカンドキャリアだけが注目をされフォーカスされるが、それでは遅きに失していることをこの看板は訴えているのではないだろうか。

最後の **Soziales** は社会性、社会力と呼ばれるものである。スポーツ選手といえども、古今東西 **Soziales** を身につけず「人」としての評価や価値が低い選手が活躍できる場はなく、若年層からの教育が必要であることは言うまでもない。

しかし近年の我が国のスポーツ界では、社会性や規律などは排除傾向にあり嘆かわしい現実がある。日本のJリーグでは、プロ選手の下のアマチュアのカテゴリーを総称してアカデミーと呼んでいるが、サッカーの育成センターに限らず、青少年スポーツセンターのような場所に、このような看板が掲げられている施設があるだろうか。

サッカーの教育力

スポーツの種類や誕生の背景から、アメリカ型か英国型かに分類することがある。今回はサッカーが中心となるので、英国型のスポーツの思想が人を育てるのにどのような影響があるのかを、Jリーグのサッカーを中心に語っていく。

サッカー五輪書

宮本武蔵の五輪書にあやかり、サッカー五輪書と命名したその中身は……。

- 1) サッカーは失敗のスポーツ
- 2) サッカーは紳士・淑女のスポーツ
- 3) サッカーはドラッグジャーリーのスポーツ
- 4) サッカーはコンビネーションのスポーツ
- 5) サッカーは孤独なスポーツ

まとめ

山路きて なにやらゆかし すみれ草 芭蕉

身体運動、スポーツ、人づくりに……なぜ芭蕉の俳句でしょうか。

【シンポジウム】

Budo World Project

2017 International Forum on Budo World

Concerning Educational Aspect of Budo

—武道の教育力—

趣旨説明 酒井利信（コーディネーター）

- ・身体を通して心を変える 前林清和（神戸学院大学）
- ・欧州における教育としての武道 ミハリク・フノール
（ハンガリー剣道・居合道・杖道連盟）
- ・武道教育における現場を知る —調査研究報告— 大石純子（筑波大学）

指定討論者：桑森真介（日本武道学会理事長、明治大学）

サボー・バラージュ（エトベシュ・ローランド大学、ハンガリー）

阿部哲史（Forum for Budo Culture (NPO), Hungary）

林 伯修（台湾師範大学、台湾）

川本千夏（ルーマニア・アメリカ大学、ルーマニア）

話題提供： 石窪真一（都城東高等学校）

※ This symposium is supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP16H03223.

本シンポジウムは JSPS 科研費 JP16H03223 の助成による事業の一環です。

通 訳

キム・ユリヤ（筑波大学大学院）

ウリベ・クラウディア（筑波大学研究生）

〔コーディネーター〕

酒井利信（筑波大学）



〔シンポジスト〕

前林清和（神戸学院大学）



ミハリク・フノール
（ハンガリー剣道・居合道・杖道連盟）



大石純子（筑波大学）



〔指定討論者〕

桑森真介（日本武道学会理事長、明治大学）

サボー・バラージュ（エトベシュ・ローランド大学、ハンガリー）

阿部哲史（Forum for Budo Culture (NPO), Hungary）

林 伯修（台湾師範大学、台湾）

川本千夏（ルーマニア・アメリカ大学、ルーマニア）

〔話題提供者〕

石窪真一（都城東高等学校）

Budo World Project

2017 International Forum on Budo World: Concerning Educational Aspect of Budo

—武道の教育力—

シンポジウム趣旨

酒井利信（筑波大学）

日本発祥の武道は、現在世界中に広まっている。近年の傾向として、海外における興味は競技としての面白さもさることながら、日本武道に潜む特有の文化性に向けられている場合が多い。つまり、武道を通して日本文化を知ろうとする意識が強くある。国際的学術界において、武道は日本研究（ジャパノロジー）の対象ともなっている。こういった傾向は特に欧州に強い。武道は、日本人が世界でリーダーシップをとっていける数少ない領域である。実際に、実技指導のみならず武道文化に関する情報提供を日本に求める声は強い。我われの研究チームは、こういった世界、特に欧州からの強い要望により、実技の普及とともに併せて武道文化の発信に努めてきた。それが本 **Budo World** プロジェクトである。
(<https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/>)

こういった欧州との交流を進める中、近年、“なぜ武道が教育として位置づけられるのか”という疑問が投げかけられている。我われ日本人にとっては、教育の中に武道があるのは既成の事実であり当たり前のことである。中学校では平成 20 年度の学習指導要領改訂により武道は必修化さえされ、教育界では今後一層その必要性が強調される傾向にある。更に身近な例で考えると、多くの親が、礼儀正しく何事にもへこたれない子供に育つと信じて我が子に武道をやらせている。しかし高所から俯瞰して考えてみると、本来は敵を倒すための技術であったものが、なぜそういった教育効果をもつようになったのか、不思議に思うのも自然なことである。我われ日本人は、この“不思議さ”にさえ気づいていない。この問題は、現代グローバル社会における武道の存在意義にかかわることであり、学術的説明は急務である。本シンポジウムは、その第一段階と位置付けられるものであり、武道の教育力について徹底討論しようとするものである。

具体的には、“なぜ武道が教育として位置づけられるのか”という問題を大きなテーマとして掲げ、以下の点について重点的に発表していただき、それをベースに総合的に討論を進めていきたい。

- 身体運動の一つである武道に期待されている教育効果とは、精神面つまり心の成長にかかわる部分が大いと考えたいだろう。従って教育としての武道を考える上で重要なことは、日本武道に特有の身体と心の関係について先ずは考えることである。近世の武術家は、心の動揺が身体の動きに悪い影響を与え、これが自らの命にかかわることを経験的に知っていたため、彼らにとって心の問題の解決は喫緊の課題であった。しかし、心は直接アプローチしても変えることはできず、逆に身体を通してでなくて

は変えることができないことも経験により知っていた。つまり“身体を通して心を変えられる”という思想が日本武道には伝統的にある。こういった身体と心の関係についての理論を“心身論”（心身関係論）といている。このロジックについて心身論のプロパーである前林清和先生に文献学の立場からお話しいただく。

- 一般的には前述のように海外においては、“なぜ武道が教育として位置づけられるのか”不思議に思われているが、一部海外においても武道の教育力に関する理解の萌芽がみられる。ハンガリーでは、2007年ごろから地方自治開発省スポーツ局が主導し、武道を青少年の道徳教育に活用しようという国家プロジェクトが始動した。このプロジェクトは政局の変化により結局は頓挫したが、武道の教育力を理解するような下地はあるということである。そして現在、ハンガリーのハイドゥナーナーシュという地方都市にある高等学校（クールシ・チョマ・シャンドル）で、剣道の授業が取り入れられている。自らもその授業に携わったハンガリー剣道連盟事務局長であるミハリク・フノール氏に、海外における武道の教育力萌芽の事例を報告していただく。
- 日本国内における武道による教育効果の実現の有無、つまり本当に武道を通して立派な心を育てられるのか、という問題をテーマとした研究は管見する限りにおいて非常に少ない。本プロジェクトにおいては、文献学的手法によるアプローチと並行して、この問題に関する調査研究を行っており、これについての中間報告を本プロジェクト・チームを代表して大石純子先生に行ってもらおう。

今回はキックオフ・フォーラムの意味も含んでおり、以上の報告を基に指定討論者のご発言を踏まえながら大いに議論し、新たな問題点を見出しつつ次のステップへとつなげていければと考えている。

身体を通して心を変える－武道における修行－

前林清和（神戸学院大学）

わが国の身体運動文化には、中世以来、身体性重視の思想が脈々と流れている。宗教界では道元が修行を通じての「身心脱落」を説き、能楽の世界では世阿弥が「型」の稽古を中核とした技の教習体系を構築した。そして、もちろん武道においても、技の修行を前提として高度な技術論と深遠な心法論を持ち合わせた人倫の道として行われてきた。

禅宗では、坐禅の修行を通じて悟りを目指す。坐禅では、身体と呼吸を整えることによって、瞑想に入っていくのである。その際、身体の乱れは心の乱れとなる。したがって、身体を正すことで心を深化させていくのである。深層心理学では、心の全体は、意識と無意識の領域によって構成されているとする。そして、人間の意識は「自我」を中心としてある程度主体的、統合的に安定して成立している。同時に、心全体の中心を無意識の奥深くにある「自己」として捉える。つまり、瞑想とは、自我を無くして無意識の領域に入り、それを繰り返すことで意識の領域を拡張し深化させることで心全体の中心である「自己」に近づくことであり、それを自己実現の過程と呼ぶ。坐禅修行は、無意識の領域への冒険であり、その過程自体が「悟り」ということになる。

ところで、武道では、平常心や不動心といった「悟り」レベルの安定した精神状態を戦いの場に求め、それを実現するべく技の稽古だけにとどまらず、稽古を通じて悟りの境地を得ることを目指した。具体的には、坐禅や内観などの宗教的瞑想修行の方法を取り入れつつ実践したのである。しかし、何より修行の中核をなすのは技の稽古である。武道の稽古は、基本的に型を採用した。型を正しく繰り返すなかで、単に技を習得するだけではなく、自我を無くすことで瞑想状態に入る。つまり動く禅としての機能も同時に果たすことで、心を深化させていくのである。同時に型は、心理的な深化だけでなく、心の安全にも及ぶ。どういうことかと言えば、人を斬る・打つ・投げるといった闘争本能を引き出すような行為は、人間の精神状態を狂気にしかねない。そのような行為を通じて「悟り」を目指すためには、枠が必要となる。つまり、型が実践者の内的な作業を守る役目も果たすのである。武道の型には、狂気の沙汰では実践できない流派の理念や真理が内包されており、それを修行することで、心は正しい道に導かれていくのである。

最後に、修行でもう一つ大切なことは、正師に会うことである。武器やその操作技術は、何も相手を殺傷するだけのものではない。私の内的世界を切り開き、自我を切り捨て新たな境地を開くのである。したがって、生半可な気持ちや間違った方法で修行すれば、自己を破壊したり、自我を肥大化したりする恐れもある。修行をするにあたっては、私心を捨て、高い志気を持って行ずることが求められる。そのためには、良き師匠に出会い、師事しなければならない。禅では、「正師単伝」とか「正伝面授」と言われるように仏法は師匠から弟子に対して直接、心から心へと伝えることである。だからこそ、武道においても正師につくことが求められるのだ。

Budo as Education in Europe

Hunor Mihalik (Hungarian Kendo, Iaido and Jodo Federation)

Abstract:

Budo education is still at its very early stage in Christian cultures.

Budo is not well understood and often misused in Europe, but there is an ever increasing need to incorporate it into European societies.

In this lecture, I am going to give a few examples of its progress in Hungary.

1. HKM-NSIR Project
 - Government funds were spent to study the effects of martial arts on health and social relations on 100 people for one year.
2. Kendo in a countryside
 - Introduction of Kendo was tested in a challenging environment and exposed to 2000 school kids.
3. Ministry of National Defence recruitment program
 - Launching a program based on Japanese martial arts to make military skills attractive to the generation, which lost contact of martial discipline to lead, take orders and to fit into hierarchy.
4. University of Physical Education Budo section
 - Planning to open a Budo section to its Department of Combat Sports

To promote the reception of Budo pedagogy into foreign cultures, academic research is needed, then free access to the results of this research, and most of all: missionary people who are going to apply it.

The question is, why the birthplace of Budo community should support such an endeavour?

欧州における教育としての武道

ミハリク・フノール (ハンガリー剣道・居合道・杖道連盟)

概要

武道教育はキリスト教文化の中では未だに初期的な段階にあります。

武道はよく理解されておらず、しばしば欧州においては誤解（誤用）されていますが、欧州社会に武道を取り入れる必要性はますます高まっています。

本発表では、ハンガリーにおける武道の発展についていくつかの事例を紹介いたします。

1. **HKM-NSIR** プロジェクト
政府の基金は、年間 100 人の人々について、健康及び社会関係における武道の効果を研究するために利用されました。
2. 地方における剣道
剣道の紹介が挑戦的な（困難な）環境において試みられ、2000 人の学童がそこに関わりました。
3. 国防省の新人（新兵）プログラム
秩序や階級制に適合するという軍事訓練から遠ざかった世代に対して、軍事技術を魅力的にするための日本武道に基づいたプログラムが開始されつつあります。
4. 体育大学武道領域
格闘スポーツ学部への武道領域開設が計画されつつあります。
外国文化の中への武道教育の受容を推進するために、学術的研究が必要であり、そのような研究結果への自由なアクセス、そして、とりわけ伝承者がそれを利用していくことです。
問題点は、なぜ武道コミュニティーの発祥の地がそのような努力を支援すべきなのかということです。

武道教育における現場を知る ―調査研究報告―

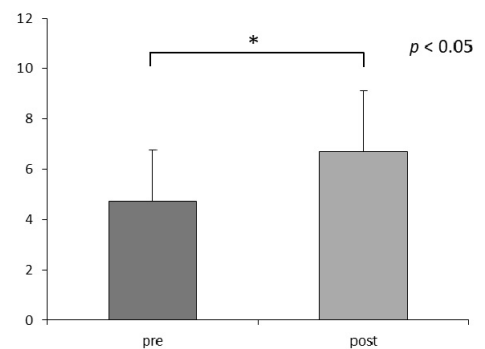
○大石純子*, 酒井利信*, 木塚朝博*, 木内敦詞*, 坂本育未**
*筑波大学体育系, **筑波大学人間総合科学研究科体育学専攻

1. 調査研究の背景 武道は、原初的には戦技であったものが、現代社会では、教育、特に心の修養と表裏一体のものとして広く認識されている。近世期に執筆された武芸伝書の内容からも、日本の武芸が心の問題を無視しては存在しえないことが、源良圓、中林信二、前林清和などの研究者によって指摘されている。特に、中林は、武道における心のあり方を、「芸道的・求道的精神性」と「倫理・道徳的精神性」という二つの系譜で捉えうることを示し、漠然とした武道の心の問題を解明する筋道を示した。表現を変えれば「芸道的・求道的精神性」は「現代社会における精神的プレッシャー（外的ストレス）を乗り越えるタフな心」、「倫理・道徳的精神性」は「人として立派であるための心」といえる。武道の心について、心理検査などを用いて分析した研究はみられるものの、中林の示した心の二つの系譜について、それらを並列的に扱った実証的調査研究は皆無である。

2. 研究目的及び研究方法 本研究の目的は、武道の教育効果としての心の二側面の成長について、実証的に明らかにすることである。心の状態の評価には「日常生活スキル評価尺度（大学生版）」（島本・石井、2006）、「二次元レジリエンス要因尺度」（平野、2010）、そして、「外傷後成長尺度短縮版」（Taku et al.,2007）を用いる。「日常生活スキル評価尺度」では、より日常レベルの心、「人として立派であるための心」が評価される。「二次元レジリエンス要因尺度」、「外傷後成長尺度短縮版」では、「精神的プレッシャー（外的ストレス）を乗り越えるタフな心」が評価される。以上を踏まえ、本研究においては、3つの尺度を用いて、武道の二つの心の側面を検証していく。

今回は、特に剣道における「特別稽古」（寒稽古、春期合宿）に焦点を当てる。これらの特別稽古は、剣道修行の一環として伝統的に行われており、精神鍛錬を主眼とするものと言われている。このように伝統慣習に基づいて行われてきた寒稽古などの特別稽古は、実際に参加者の心のあり様に変容をもたらしているのであろうか。この点について、3種の心理尺度を用いて検証した。

3. 結果 今回の調査結果では、武道の心の二側面のうち、「外的ストレスを乗り越えるタフな心」が「寒稽古」「春期合宿」を通して成長していることが確認された。本研究を通して、伝統的に語られてきた「寒稽古」等の特別稽古の精神鍛錬効果が、単なる独善的な思い込みなのではなく、客観的事実として実証された。



寒稽古の外傷後成長尺度短縮版

「人間としての強さ」尺度の結果

〔話題提供〕

石窪真一 氏 (都城東高等学校)

豊栄学園 (宮崎県) とハイドゥナーナーシュ市 (ハンガリー) が 結ぶ教育的国際連携の取り組み

学校法人豊栄学園 都城東高等学校



現地での活動内容

- ①クルーシ・チョマ・シャンドール高校での授業 (体育、剣道)
- ②ハイドゥナーナーシュ市での文化普及活動
- ③ハンガリー剣道連盟との連携
- ④ヨーロッパ各地へのルート構築

経緯

2014年 5月：教員交流・生徒間交流を主とした協定書締結
2016年 10月：教員交流開始 豊栄学園より教員派遣 (2年間)

具体的な関係

「グローバル教育」
「デュアル教育」
「儒教道徳教育」
を3本の大きな柱として
教育を推進



ハイドゥナーナーシュ市

ハイドゥー・ビハール県の北西部にある
人口約1万7千人の都市。
伝統的な建築が随所に見られる町並みは
観光地としても有名
日本とのつながりも深く、
2016年には日本アートコンペティション
も開催されている。

豊栄学園との交流に
対して全面的に支援



学校法人豊栄学園 都城東高等学校

グローバル教育・デュアル教育・儒教道徳教育の推進
海外との交流状況 (※過去3年間の実績)

海外からの留学生・教育実習生 (ST) 受入

長期：3名 (アメリカ・キューバ・フィンランド)
短期：約100名 (アメリカ・イタリア・ドイツ)
S T：約50名 (フィリピン 3ヶ月交代)

本校からの留学状況

長期：2名 (アメリカ、フィリピン)
短期：45名 (フィリピン、アメリカ)

生徒数 450名

総合ビジネス科・普通科・調理科・自動車工業科・看護科



クルーシ・チョマ・シャンドール高校

教育委員会から指定された教育推進校

外国語教育の強化 (英・独・仏)

生徒数 1100名

普通科・情報科・機械科・社会福祉科・行政科など

一般研究発表抄録集

スケジュール

期日：平成 29 年 12 月 10 日（日）9:00～

会場：筑波大学筑波キャンパス 5C 棟 216 室

座長：有田 祐二（筑波大学）

時間	発表者	演題
9:00～9:20	吉本陽亮 (奈良保育学院)	大正期における民衆の武道受容について―「奈良県風俗誌」にみる―
9:20～9:40	軽米克尊 (天理大学)	近現代における直心影流に関する一考察 ―山田次朗吉以降の系譜を中心に―
9:40～10:00	数馬広二 (工学院大学)	江戸時代在村剣術の成立と展開についての研究～上州馬庭念流の普及・定着と世話役人制度について～

座長：長尾 進（明治大学）

10:00～10:20	吉谷修 (久留米工業大学)	久留米市内におけるソーレ事件と西郷四郎の動向
10:20～10:40	林洋輔 (大阪教育大学)	「体育学概論」は成し得るか:「哲学のすすめ」と「医学概論」の視点から
10:40～11:00	齋藤実 (専修大学)	身体接触を伴うスポーツの経験が心の発育・発達に与える影響～大学アスリートに対する調査から～

座長：木塚 朝博（筑波大学）

11:00～11:20	鷹見由紀子 (順天堂大学)	女子剣道選手の心理特性 ―DIPCA.3とバウムテストを用いて―
11:20～11:40	川面剛 (九州共立大学)	ハーフコート・ディフェンスのポジショングに対する考え方の因子分析的研究
11:40～12:00	金谷麻理子 (筑波大学)	大学体育における学修内容の再検討

大正期における民衆の武道受容について —「奈良県風俗誌」にみる—

○吉本陽亮（奈良保育学院）

【目的】

大正期は日本の様々な文化の転換期であり、大衆社会の礎を築いた時期である。社会的な面では、都市化が進み、西洋風のライフスタイルへと変化しつつあった。このような中で運動競技は明治神宮大会を代表とするように大規模な「イベント化」「スポーツ化」へと準備を進めるようになる。一方でそれまでの文化・伝統を尊重していこうとする動きも現れる。特に武道は武徳会をはじめ、西洋的な「スポーツ」とは異なるものであるという立場を主張した。このことは武徳会が第二回明治神宮大会に不参加表明を出したことからも窺える。この点については太田ら（2003）が論述しているように、その理由は主に「武道は他の運動競技と類を異にして、精神修行を主としている」「勝負を争うべきではない」とのことであった。これに対して内務省を主催とする大会側は外来スポーツを「競技道」と表現し、武道とスポーツ双方の長所を取り合うべきであるという考えを主張した。その後の明治神宮大会では、武徳会もこれに了承し、剣道・柔道・弓道・相撲などの武道が盛大に行われている。

こういった武道の「競技化」への論議は各地の競技熱の高まりに端を発するのではないかと思われる。本研究では、多様な文化が入り混じったこの時期に地域の民衆は武道をどのように受容していたかを明らかにすることを目的とする。

【研究方法】

本研究では、主に資料「奈良県風俗誌」を分析の対象とした。「奈良県風俗誌」とは、大正4（1915）年、奈良県教育会が大正天皇即位大礼記念事業として企画したものである。奈良県全域の市町村で、日常生活に関する約1200の質問について一斉に聞き書きをするという全国的にみても類のない調査を行い、膨大な資料群を収集した。「奈良県風俗誌」の編纂委員を務めたのは奈良県師範学校教諭の高田十郎である。調査の目的は、「世界の交通が発達し、各地の風俗が互いに影響し合う大正期に、我が風俗のどれほどが本来のまま、どれほどが変化したのかを調べておくことが今後の日本にとって必要である」とのことからであった。

本研究では、この「奈良県風俗誌」に記載されている、各市町村の武道に関する内容を集計し、武道の受容について分析を試みた。

【先行研究】

「奈良県風俗誌」に関する主な先行研究としては以下の研究が挙げられる。

○安井眞奈美『出産・育児の近代—「奈良県風俗誌」を読む—』法蔵館,2011.

○中井精一（編）『奈良県風俗誌（26類・言語）国中地域編』1998.

○関沢まゆみ『『風俗誌』にみる儀礼と習俗の変化—記録された明治大正期の人生儀礼—』（『国立歴史民俗博物館研究報告』141）2008.

これらの先行研究は、膨大な資料群である「奈良県風俗誌」から焦点を絞って整理・翻刻し、分析している。例えば、安井（2011）の研究では、出産と育児に焦点を絞って綿密に分析が行われている。しかし、「奈良県風俗誌」に記載されている武道に焦点を絞った研究はこれまでされていない。

【概要】

「奈良県風俗誌」における調査の項目は、第一類の「建物造作」から第三十九類の「経済」までの39の大項目からなり、その下位に260の中項目、1248の小項目が設けられている。

調査の回答の中に、武道に関する記述が最も多くあったのは、第十六類「慰藉・娯楽」の第三項「室外遊戯」という質問項目に対する回答であった。同じ中項目の「休日」「室内遊戯」などと並んで娯楽的な範疇のものとして捉えられ、奈良県内の各市町村のほとんどが剣道（撃剣）・柔道・相撲（角力）などの武道を挙げている。

その担い手として最も多く記述されていたのは、この頃、全国各地で組織されていた青年会（団）員である。添上郡東里村では、近頃青年会員が「撃剣を行はしめて体力の増進に勉めつつあり、駐在巡查を師範として稽古をなす有様なれば斯道の達人となるべきひともなし」というように体力の増進を目的として村の駐在員から撃剣（剣道）を学んでいたことが記述されている。北葛城郡の村々では、村内の学校教員を師として、実践場所は、「寺及び社前を撃剣柔道の道場」としており、武道を志す者が増加していたとある。また、山辺郡豊原村では、村内で一組の剣道具を購入し、夜間や休日に青年会で盛んに稽古し、青年以外にも興味を持ったものが続々と参加したようである。青年たちの間で武道を実践することが盛んになっている一方で、指導者や場所、用具の不足によってその実践に至ることができない村々もあったようである。山辺郡朝和村の「撃剣、柔道の心得ある者はあれども地方に稽古場並びに道具なければ夢にも、かかること見るを得ず」や、宇知郡の「青年会には具足を備へ稽古せるものあり然れども適當の指導者を得ること出来ざる故に永続せず」という記述に見受けられた。

「奈良県風俗誌」において武道は、「室外遊戯」として、魚釣りや乗馬、鉄棒などと並んで報告されていた。武道実践の主たる担い手は青年会（団）員であり、興味を示した有志の者たちもあいまって、盛んに行われていた。また、指導者や練習の用具、場所を求めるほど武道の実践に憧れていたことから武道は大変な競技熱を帯びていたといえるだろう。本研究によって、このころの武道は奈良県内の民衆にとって身近なものであり、多様な目的意識をもって人々の興味を引くようなものであったことが窺えた。

近現代における直心影流に関する一考察

—山田次朗吉以降の系譜を中心に—

○軽米克尊（天理大学体育学部）

酒井利信（筑波大学）

大石純子（筑波大学）

木塚朝博（筑波大学）

I. はじめに

直心影流は近世中期、従来から行っていた形稽古に加え、身を守る道具としないを用いて行う「しない打ち込み稽古」を流行させ、大いに繁栄したといわれている。このしない打ち込み稽古と形稽古を併修する稽古方式は、現代剣道に継承されており、稽古形態という点からすれば、直心影流が現代剣道に与えた影響は大きいと考えられる。

直心影流の道統は現代にまで継承されており、法定^{ほうじょう}をはじめとする直心影流の形が多くの人々に稽古されている。このような状況をつくった人物としては、榊原鍵吉から直心影流を継承し、明治から昭和のはじめにかけて東京商科大学（現：一橋大学）において直心影流を指導した山田次朗吉が挙げられる。筆者は平成28年度の日本武道学会第49回大会において「近代における直心影流に関する一考察—山田次朗吉と東京商科大学を中心に—」と題した研究発表を行い、近代期以降の山田次朗吉を中心とした直心影流の動向について論じてきた。本研究においては、その次の段階として、山田の後の道統について、現代まで直心影流がいかに継承されてきたかを考察する。

II. 先行研究の検討と問題の所在

近現代における直心影流に関連する先行研究としては、①榊原鍵吉及び撃剣興行に関する研究、②榊原鍵吉の門下に関する研究、③星野仙蔵及び練胆操術に関する研究、の3つに大別することができるが、①③に関しては、撃剣興行・練胆操術という点に焦点が向けられており、直心影流という一流派の動向について研究がなされているわけではない。

②については、榊原鍵吉の門下の1人である野見鍬次郎の伝系について、その末裔である石垣安造が取り上げているが、直心影流の正統な継承者を山田次朗吉ではなく、野見鍬次郎としていることから、山田次朗吉以降の流れについては一切言及がない。

前述の通り、現在、直心影流の道統は流派という枠を越え、法定^{ほうじょう}をはじめとするいくつかの形が現代剣道の実践者などによって稽古されている。この流れの多くは下に挙げる図の通り、山田次朗吉から出ている。

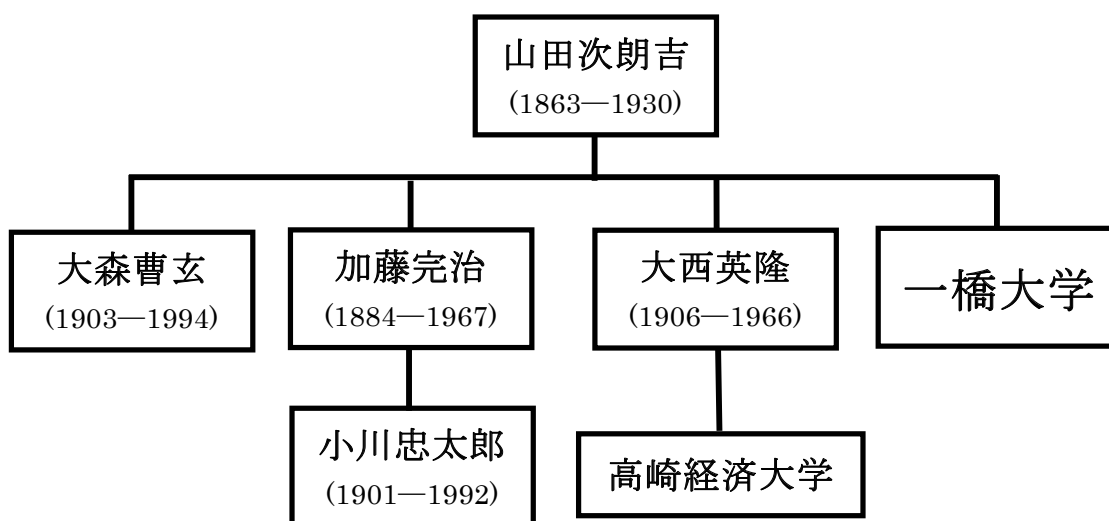


図1 山田次朗吉以降の直心影流の系譜

この点から筆者は山田次朗吉が長い間指導していた東京商科大学（現：一橋大学）に焦点を当て、研究発表を行った。しかし、これまでに考察を行ったのは、東京商科大学における山田の指導初期から昭和初期（第2次世界大戦前）までとなっており、未だその後の考察には至っていない。また、山田次朗吉以降の系譜の全容を明らかにするには一橋大学以外の系譜にも目を向ける必要がある。

これまで考察を行ってきた一橋大学に加え、山田次朗吉以降の系譜を詳細に考察することで、近代から現代にいたるまで、直心影流がいかに継承されてきたか、その流れを正確に把握することが出来、武道学研究において一端の意義を有すると考える。

以上のことから、本研究においては、山田次朗吉以降の直心影流の系譜について、可能な限り広くあたり、いかに継承されていったかを明らかにすることを目的とする。

Ⅲ. 考察

現段階では、以下の点が明らかとなった。

- 山田の系統を継承した人物の1人である大西英隆は後に高崎経済大学において直心影流を指導するが、大西が身に付けた法定は他の山田の弟子からすると、山田の法定と大いに相違点があり、大西の系統は1つの分派として捉えるべきだとする見解も見られる。
- 山田次朗吉の死後も一橋大学において法定など直心影流の形が継承されていくが、山田の直弟子によると、山田が指導していた法定と相当に異質なものに変容してしまっており、違和感を覚えたという。

なお、本研究は JYPS KAKENHI Grant Number JP16H03223 の助成を受けている。

江戸時代在村剣術の成立と展開についての研究
～上州馬庭念流の普及・定着と世話役人制度について～

数馬広二（工学院大学 教育推進機構 保健体育科）

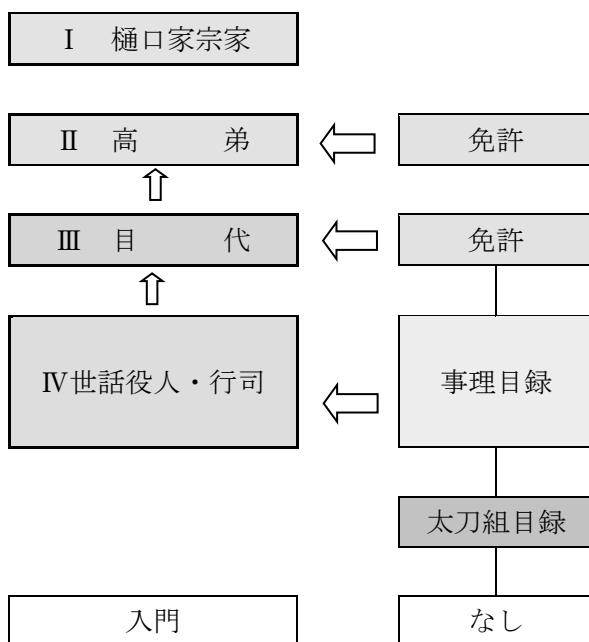
はじめに

兵農分離が断行された江戸時代の村落では、幕府により禁止され実在するはずのない武術流派が伝承されるという兵農未分離の状態が黙認されていた。馬庭念流は16世紀末に上野国に興り、武蔵国の村々や江戸市中へも拡大し、その門人のほとんどが農民であった。本研究では、馬庭念流の普及・定着と世話役人制度について考察するものである。

1. 門人の増加と広がり

天正19年（1591）、樋口家により始まった馬庭念流は、安定して入門者が確認できるのは貞享2年（1685）になってからである。1685年～1835年まで合計門人7,437名の分布をみると、上野国各郡で5,426名（72.96%）、上野国5藩（吉井藩、小幡藩、安中藩、高崎藩、七日市藩）で439名（5.9%）があり、まさに上野国土着の剣術流派である。また武蔵国の928名（12.48%）、信濃国（1.95%）、江戸（1.59%）のほか、下野国、下総国、上総国、播磨国、遠江国、山城国、陸奥国、伊勢国、長門国、甲斐国に門人がいた。

2. 太刀組目録授与制度のはじまりと地域指導者の養成

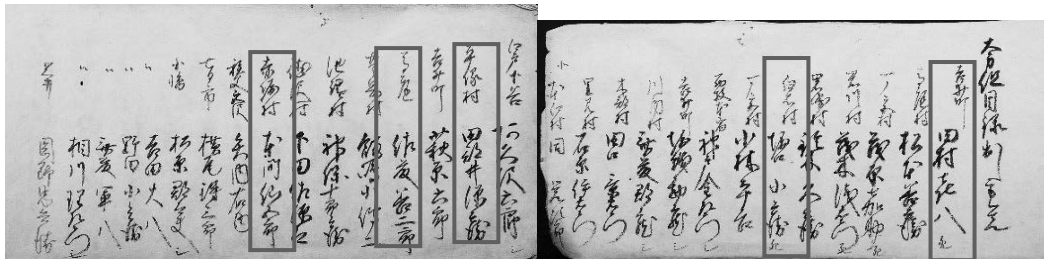


馬庭念流の階梯と目録段階の関係(仮説)

馬庭念流の階梯と目録段階の関係については、左図のような仮説がある。すなわち、入門から高弟に至るまでの階梯と目録段階の対応である。まずI樋口家を宗家とする頂点があり、II本間家、田部井家、四分一家などの高弟が続き、III地域での指導者資格をもつ目代は「免許」を必要とした。IV世話人や行司は「事理目録」が授与されていたと考える。入門後初の目録が「太刀組目録」である。

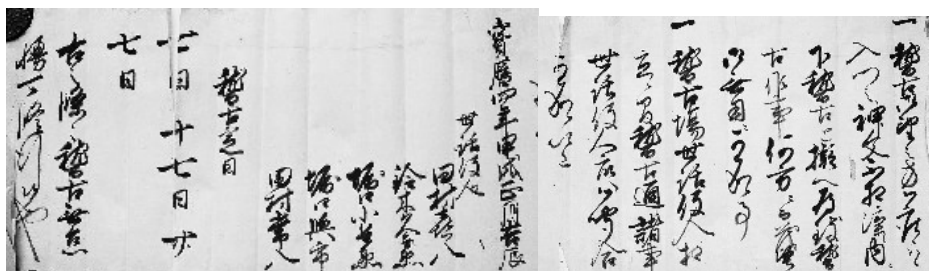
18世紀に門人が増した起因の一つに、寛保2年（1742）、樋口将定が隠居する折、近在の門弟5人（上野国上池村、吉井村、君川村、一宮村、馬庭

村)に「太刀組目録」を伝授したことが挙げられる。歴代の「太刀組目録」保持者のうち、「世話役人」となった田村喜八や堀口小兵衛、「目代」となった佐藤善次郎、そして「高弟」となる田部井源兵衛や本間仙五郎の名が「太刀組目録出候所覚」(1775年 樋口家文書)の線で囲んだ部分に記載されているのである。



3. 世話役人制度と流派内部の統制について

「太刀組目録」を所持する門人のうちから世話役人が任用された。世話役人は①道場規約の整備、②入門帳の管理、③破門処分とその処理、④神社奉納額の資金収集などに関わった。下写真の事例は、宝暦4年(1754)『覚』(樋口家文書)の一部で、道場規約、稽古日などを世話役人が管理したことを示している。



また、寛政12年(1800)3月、上野国緑野郡東平井村の平野政七が酒乱のため「御流儀御名目」を傷つけた理由で一度破門になった一件で、馬庭念流の世話役人は、一時帰門を許し、さらに懲りない平野政七へ二度目の破門宣告をしつつも、連帯責任として世話人までもが禁酒をし、政七の復帰を宗家に願い出た事例がある。(樋口家文書)

4. まとめにかえて

馬庭念流が普及、定着するには、「太刀組目録」を始めとする目録授与制度の整備と、世話役人の任用が必要であったと考えられる。門人の増加に伴い、より厳格なルールによる統制が必要であった。一方で、世話役人は門人と宗家をつなぐ橋渡しの役割も担っており、馬庭念流が「世話役人」を制度化したことにより、馬庭念流内部での結束が強化されることに繋がったのであろう。

久留米市におけるソーレ事件と西郷四郎の動向

吉谷 修（久留米工業大学）

はじめに

明治 27（1894）年 10 月、久留米市において「ソーレ事件」と呼ばれる事件が発生している。この事件は、久留米市の生徒たちが、キリスト教のフランス人宣教師ミセル・ソーレ宅に投石を行い収監されたというものであるが、日仏間の国際問題に発展することを恐れた関係者らによって新聞報道などが差し止められたため、事件自体があまり公にされなかった。

ソーレ事件が起こった同時期、久留米市には「南筑私学校」という、柔道と国学を教える私塾が存在していた。この南筑私学校で、講道館を去った西郷四郎が柔道教師をしており、西郷とソーレ事件とを関連付けて語られることもある。例えば、石橋和男著『良移心頭流 中村半助手帳』¹⁾には、以下のように記載されている。

或る日、西郷、渡辺、山田、萩原の四名の国粹主義者たちは、「日本には日本古来の宗教があるので、キリスト教等布教しなくても結構だ。一日も早く布教を止めて帰国せよ。」と言う理由で押問答してあばれ、警察沙汰となったことがある。この事件以来西郷は当地を去り長崎へ行った。

いくつかの出版物でこのような記述がなされているが、筆者は、久留米市立図書館にて、少年期に実際にソーレ事件に加わった吉田清という人物が、昭和 10 年頃に、事件の概要を郷土史家の篠原正一氏に語った記録が「ソーレ事件の顛末」というタイトルで、『木南帖子』という出版物の中に掲載されているのを見出した。同書は、篠原氏が郷土史家間での情報の共有や記録の保存を主な目的として、ガリ版印刷したものを数回にわたって関係者に配布した資料をまとめたものであるが、ソーレ事件に関して記述された史料としては、最も正確なものでないかと考えられる。

現在、幾人かの研究者によって西郷四郎の研究がなされているようであるが、久留米市史のみならず、西郷研究の基礎資料として資することを期して、今回、「ソーレ事件の顛末」から、事件の概要について発表すると共に、事件前後の西郷の動向から、事件との関連性や西郷の思想等について発表する。

I ソーレ事件の概要

「ソーレ事件の顛末」によれば、事件に加わったのは、当時の中学・高等小学校の生徒ら二十数名で、事件が発生したのは明治 27 年 10 月 21 日である。当時、14 歳で最年少であった吉田の証言によれば、いわば面白半分でソーレ宅に投石を行っていたところ、近隣住民からソーレが裏門から出て行った。」との連絡を受けたため、アリバイ作りのために下坂道場（良移心頭流）に引き揚げ、出席簿に記名した。

その後の展開は、下記の通り。

ソーレ神父→長崎のフランス領事館へ報告→フランス公使に報告→日本の外務省へ抗議
→福岡県へ取り調べ命令→久留米警察署へ逮捕命令→10月下旬頃から生徒らを逮捕・首領
格の数名を20日間程度の禁固処分→12月12日福岡県知事より、久留米尋常中学明善校 校
長 松下丈吉へ譴責処分

概要は上記の通りであるが、一方で、西郷らがソーレ邸へ押しかけていったという話も
別途残ってはいる。

II ソーレ事件前後の西郷四郎の動向

ソーレ事件前後の西郷の動向を、時系列的にまとめると、下記ようになる。

明治 23 (1890) 年 6 月 講道館を出立 (91 年嘉納ヨーロッパより帰国後、追放処分)

明治 26 (1893) 年 4 月～6 月 養父西郷頼母宅滞在 (8 月に縁女よし江を離縁)

その後渡朝

明治 27 (1894) 年 3 月頃 帰国

7 月 仙台二高で柔道師範

11 月 仙台二高で柔道講演

それ以降、久留米南筑私学校にて柔道師範

明治 28 (1895) 年 7 月 九州柔道大会にて模範演武

明治 29 (1896) 年 9 月頃 渡台

おわりに

ソーレ事件当時、西郷が仙台に滞在していた点、吉田の証言の中に西郷が出てこない点、
吉田らが引き上げた下坂道場は良移心頭流の道場である点、譴責処分を受けたのが久留米
尋常中学明善校校長であった点を合わせると、ソーレ事件とは別途西郷らがソーレ宅に押
しかけた可能性が残るにしても、ソーレ事件に西郷が関わっていなかったのは明らかであ
る。

また、西郷が講道館を去り、渡朝等を経て久留米に招かれた経緯については、後に東洋
日の出新聞を立ち上げた鈴木天眼との関わりが強いようである。この辺の事情については、
別途資料を示しながら、当日発表したい。

〈本文註〉

1) 石橋和男『良移心頭流 中村半助手帖』1980 年

「体育学概論」は成し得るか：「哲学のすすめ」と「医学概論」の視点から

林 洋輔（大阪教育大学）

本発表は「体育学の哲学」としてその成立が目論まれる「体育学概論」の外郭と実質とを哲学研究の立場より明らかにする。

「哲学入門」という言葉を読んだりその響きを耳にしたりするとき、人は何を想起しうだろうか。おそらくは大学制度のうちに発議された哲学の問いおよびその回答をめぐる現今まで如何なる議論がなされたか、あるいはそもそも「哲学」なる営みがどのようなものであるかについて観点別に概説のなされた書物を想起するに違いない。しかしながら、紀元前より哲学者たちによって連綿と書き継がれた「哲学のすすめ」——いわゆる「プロトレプティコス（入門）」と呼ばれる著作群——とは、単にその著者自らの唱えた学説の理論的な祖述に留まるものではなく、むしろ読者を当該理論に基づく「生き方」へと導き入れる勧告文書でもあったことは後世の哲学史家たちがつとに指摘するところである。

上記の歴史的背景を受け、本発表の序盤では哲学史に散在する「哲学のすすめ」の実質を検討し、また中盤では自然科学分野における類似の先行事例として「医学の哲学」とも通称される「医学概論」をも検討対象とすることにより、体育学を支える基幹理論とそれに依拠した「生き方」を勧告する「体育学へのプロトレプティコス」、すなわち「体育学概論」の成立に向けた外郭とその実質とを明らかにする。

古代における哲学者たちの評伝および学説史として参照されてきたディオゲネス・ラエルティオスの『ギリシア哲学者列伝』において、各哲学者たちの著作目録のなかには「プロトレプティコス」の所在が多数確認できる。一例として挙げるならば、わが国の哲学研究史においても著名なプラトンの『エウテュデモス』やアリストテレスの『哲学のすすめ（プロトレプティコス）』、さらにはエピクロス『メノイケウス宛て書簡』などが指摘できる。また古代ローマ期の哲学においてもキケロの『ホルテンシウス』、あるいはセネカによる一連の「ルキリウス宛て書簡」——いわゆる『倫理書簡集』——などがその性格をもつものとして挙げられる。さらに歴史家の区分で言われる近代においてはデカルトによる『哲学原理』仏訳序文がその内容を根拠として参照されるべきであって、自らの哲学観や思想体系さらにはそれに依拠した人間の生き方が論じられた哲学の書、つまり「プロトレプティコス」は通時的に確認できる。この「プロトレプティコス」の伝統は現代のわが国でも田中美知太郎の『哲学初歩』が内容面から推してその轍を辿ると言えるのであって、単なる学説紹介および解説に終始することのない「哲学のすすめ」、踏み込んで言えば「哲学的生のすすめ」が上記諸事例の通り哲学史上に遍在する。本発表の序盤ではそれら「プロトレプティコス」の概説と実質の別括を試みることにより、本発表の最終目標である「体育学概論の外郭および実質の解明」に向けたいわば外堀を埋めることとしたい。

他方、本発表の中盤では上記の「体育学概論」の成立に向けた有意義な参照項として『医学概論』に着眼した検討を行う。というのも、「体育学概論」の外郭と実質とに深い影響を与える議論がこの『医学概論』に含まれるそれだからである。より具体的に言えば、フランス哲学を専攻としながら医学についても多くの思索を残した沢潟久敬おもだかひさゆきの『医学概論』を主たる検討対象としつつ議論を進めていく。京都学派の哲学者である田辺元の『科学概論』に触発されたとされる沢潟の『医学概論』はそれぞれ「科学について」「生命について」そして「医学について」の三部から成り、医学者として歩む上での思想基盤や学問分野としての医学の背景にある科学史科学哲学の発展過程、さらには現代における問題状況を詳細に述べるばかりではなく、医学者としての生き方を説く「医道」を掉尾に配する。すなわち、単なる医学理論の体系と現状解説にとどまることなく科学と哲学の統合された知見に依拠する医学者のあるべき生き方が説かれることにおいて、沢潟の議論は哲学における「プロトレプティコス」の伝統を医学に移して体現しているといえる。本発表ではこれらの事例を通じて「体育学概論」の外郭および実質解明についての議論を深める。

本発表の終盤ではこれまでの議論を受け、「体育学概論」の成立に向けた議論を進ませる。周知のように、体育学とは単に制度教育のなかの「体育科」の授業を成功させる条件の探求を専らとする学問ではない。むしろ体育学とは「人間の身体運動」を鍵語として運動競技における勝利の追求を期した研究はもとより、健康施策を実践するための軽運動プログラムの開発に加えて人間の発育発達に関わる検討、さらには諸邦における身体文化の洗練化ならびに伝播の軌跡をなぞる歴史人類学の視点をも包括した「総合人間学」である。これらを踏まえて「医学概論」において考察対象であった「科学」「生命」「医学」になぞらえて言うならば、「体育学概論」では次の三つの概念が主要な検討対象と言える。第一に、その概念が膨張を続け内包の不確定になりつつある「体育」の概念。第二に、学校制度における「体育科」の教材でありいわば世界規模の公共文化財である「スポーツ」の概念。第三に、それら両者を包摂する形で常に体育学と不即不離の関係にある「文化」の概念。これら三つの概念が「体育学の哲学」としての「体育学概論」における不可欠の考察対象となり、外郭をなす。そして考察対象となる根本概念として「体育」と「スポーツ」、さらに「文化」の三概念を問うて思索を深めることが「体育学概論」における主要な議論の実質である。またそれらの概念と人間との関係、明言すれば人間の生き方に対する「体育」と「スポーツ」そして「文化」各々の位置関係を再定義することが「体育学概論」の課題となる。本発表ではこれらの外郭および実質をいわば出立地として示すことにより、以後における「体育学概論」の展開に向けた行論の道筋を探りたい。

身体接触を伴うスポーツの経験が心の発育・発達に与える影響 ～大学アスリートに対する調査から～

齋藤 実 (専修大学)、小澤 聡 (常磐大学)

背景と目的

スポーツ時における身体接触は外傷を引き起こす要因の一つであり、事故が生じた場合には責任問題に発展する場合がある。このことから、近年では身体接触を伴う競技種目が敬遠される傾向や、競技特性から身体接触を排除したようなルールにて変更するスポーツもある。その一方、学校内を含む若年層の暴力事件やいじめ問題で“他者の痛みを知らない”ことが語られることがある。これらには、身体接触の機会の少なさがその一因となっている可能性はないだろうか。本研究では、これまで注目されてこなかった身体接触を伴うスポーツが、心の発育・発達に与える効果を明らかにすることを目的とし、成人期を迎えた大学生を対象としてその調査を行った。

調査対象および調査方法

調査は、大学体育会強化部に所属する学生 439 名を対象とし、質問紙による調査を行なった。本研究で使用する質問紙の作成にあたり、予備調査として自由記述にて回答を得られる 4 項目のスポーツのイメージと教育効果に関する質問からなる質問紙を作成し、99 名のスポーツ指導者から回答を得た。その回答をテキストデータ化し、Text Mining Studio (NTT 数理システム社製) を用いてテキストマイニングによる分析を行った (身体運動文化学会 2014)。その分析結果から、スポーツのイメージと教育効果として、「スポーツマンシップ」、「攻撃性」、「レジリエンス」、「プライド」、「社会的技能」、「同情 (痛み)」、「情動的共感」が挙げられたことから、この結果を元にそれぞれを心理学的に評価することのできる既存の質問紙を選定し、調査時に対象の負担とならない数の範囲にて、アスリートへの質問として適していると考えられる質問項目を抜粋した。抜粋した質問項目は 43 問であった。

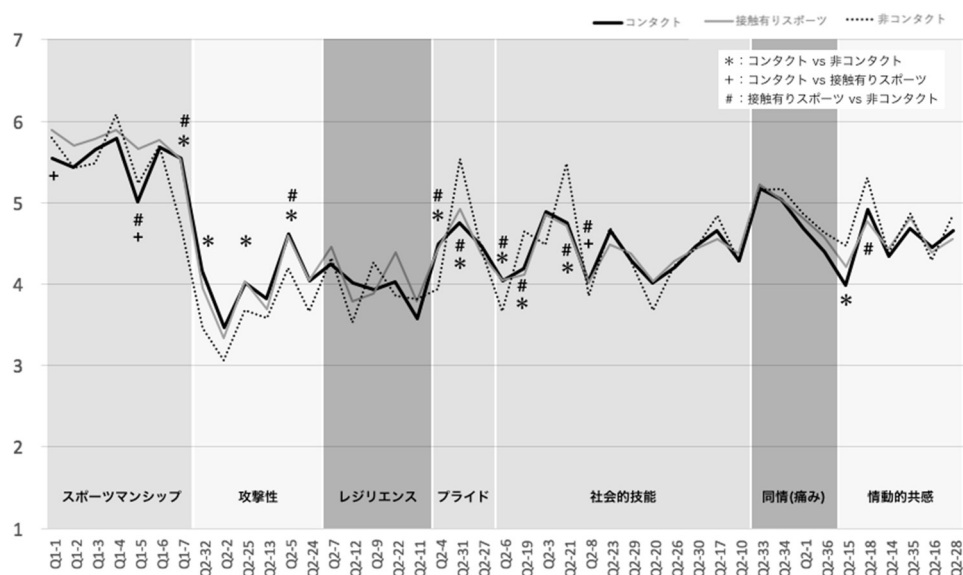
回収した質問紙をコンタクトスポーツと非コンタクトスポーツ、接触有りスポーツの 3 グループに分けて分析を行った。なお、コンタクトスポーツは、ラグビー、相撲、アメリカンフットボール、レスリング、剣道、柔道とした。非コンタクトスポーツは、スキー、陸上競技、水泳とした。接触有りスポーツは、相手との接触をしながらプレーを行う競技種目とし、バスケットボール、アイスホッケー、水球、サッカー、ハンドボールを分類した。コンタクトスポーツは計 156 名、非コンタクトスポーツは計 92 名、接触有りスポーツは計 191 名であった。分析は二元配置分散分析を用いて行った。調査実施に際し、調査の目的とデータの分析方法を対象者に説明し承諾を得た。なお、本研究は専修大学スポーツ研究所研究倫理委員会の承認を得た。

結果と考察

本調査では、「スポーツマンシップ」、「攻撃性」、「レジリエンス」、「プライド」、「社会的技能」、「同情 (痛み)」、「情動的共感」の 7 つの心理面について、大学アスリートを対象に調査を行ない、

コンタクトスポーツと非コンタクトスポーツ、接触有りスポーツの3つのグループに分類して分析した。その結果、3つの特徴を見ることができた(図)。一つは、「レジリエンス」において、各グループ間に差のある質問が見られなかったことである。「レジリエンス」とは、「深刻で危険な状況にかかわらず、適応的な機能を維持しようとする能力 (Rutter, 1985)」、「人が不遇な境遇に出あったときに発揮される力 (佐藤と祐宗, 2009)」とされ、恐怖を伴うような強いぶつかり合いを伴うコンタクトスポーツにおいては、非コンタクトスポーツと差異があることが予想されたが、本調査においては差を認めることができなかった。二つ目は「同情(痛み)」と「情動的共感」において、コンタクトスポーツと非コンタクトスポーツに差がなかったことである。「誰かが助けを必要としているとき、助けてやりたい」、「困っている人たちがいてもかわいそうだという気持ちになる」などの質問からなる「同情(痛み)」や「情動的共感」は、心身ともに痛みを感じやすいと考えられるコンタクトスポーツにおいても、非コンタクトスポーツと差は認められなかった。三つ目は、コンタクトスポーツと接触有りスポーツに類似の傾向が認められたことである。接触有りスポーツでは、戦略的に身体接触を行う場面が多くあることや、本研究ではそれぞれのグループに対人種目とチーム種目が混在していることがその要因の一つとなっていることが考えられる。

大学アスリートを対象とした本研究の結果からは、コンタクトスポーツにおいて同情(痛み)や情動的共感の心理面に与える影響は見ることができなかった。一方で、「攻撃性」が非コンタクトスポーツよりも高い傾向にあったことは、注目すべき点といえるだろう。先行研究では、スポーツ実践者の心理面は、競技レベル、競技経験年数、集団スポーツか個人スポーツか、などの要因によって変わることが報告されている。コンタクトスポーツが心理面に与える影響の詳細については、更なる調査が求められる。



大学アスリートにおける
 コンタクトスポーツ実践者と非コンタクトスポーツ実践者の心理面の差

本研究は「幼少年期における身体接触を伴うスポーツの経験が心の発育・発達に与える影響 (JSPS 科研費 26560420)」の助成を受けたものです。

女子剣道選手の心理特性 —DIPCA.3 とバウムテストを用いて—

鷹見由紀子（順天堂大学）、中島郁子（新潟医療福祉大学）、
中村 充（順天堂大学）、大野達哉（順天堂大学）、
岩本貴光（別府大学）

【目的】

日本古来の武道である剣道では、全日本剣道連盟が掲げる剣道の理念に「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」と記されているように、技術向上のみならず、「人間形成」いわゆる「精神鍛錬」にも重きを置いている。剣道選手の精神性に関する研究は、現在まで男子を対象とした研究がほとんどである。しかしながら、女子を対象とした指導方法の確立のためにも男女の性差による心理特徴を明らかにする必要がある。そこで、本研究では、女子に着目し、女子剣道選手の心理特性を明らかにすることを目的とする。

【研究方法】

調査対象者は、日本女子剣道トップ選手 8 名（世界剣道選手権大会日本代表または全日本女子剣道選手権大会ベスト 4 以内）、女子大学生剣道選手 41 名（関東女子学生優勝大会および全日本女子剣道優勝大会ベスト 8 または 16）の計 49 名とした。

調査内容は、DIPCA.3（心理的競技能力診断検査）およびバウムテストの 2 種類の心理調査技法を実施した。DIPCA.3 は、質問紙を用いて、スポーツ選手の一般的な心理的傾向としての心理的能力を 12 の内容（忍耐力・闘争心・自己実現意欲・勝利意欲・リラックス能力・集中力・自己コントロール能力・自信・決断力・予測力・判断力・協調性）に分けて判断する¹⁾ものである。バウムテストは、調査対象者に対して 4B 鉛筆と A4 判画用紙を用いて、「一本の実のなる木を描いてください」と教示し、描かれた絵から分析を行う描画法による人格検査の一種である。調査にあたっては、調査対象者に研究の目的ならびに方法について十分に説明し、同意を得た上で実施した。

調査期間は、20XX 年～20YY 年の期間で、いずれも主要な大会が終了した段階で実施した。

分析方法は、DIPCA.3 においては、回収した質問紙を業者に委託し分析を行った。また、その結果は独立したサンプルの t 検定により有意水準 5%未満を統計学的有意と判断した。バウムテストにおいては、「幹の太さ（指 3 本以上）」、「幹の線の引き方（一本線）」、「短い幹・大きな冠部（幹に対する冠部の比率）」、「上縁はみ出し」、「幹下縁立」、「枝あり」の計 6 項目を分析項目とした。²⁾なお、バウムテストの結果においても、独立したサンプルの t 検定と Fisher's Exact Test により有意水準 5%未満を統計学的有意と判断した。

【結果および考察】

DIPCA.3 の集計結果から、日本女子剣道トップ選手群と女子大学生剣道選手群の比較に

において、「自己実現意欲」、「リラックス能力」、「自己コントロール能力」、「自信」、「決断力」の5尺度と総合得点において、日本女子剣道トップ選手群が女子大学生剣道選手群より有意に高い数値を示した。また、有意差はみられなかったが、両群の各診断尺度の平均値は「勝利意欲」のみ、女子大学生剣道選手群が高い数値を示した。DIPCA.3を用いた男子を対象とした植田ら³⁾の研究で、「自信」の尺度において、全日本強化選手群が大学生群および高校生群に比べて高い数値を示している。さらに、徳永ら⁴⁾は、競技レベルの高い選手ほど、「自信」、「作戦能力」で顕著に優れていると報告している。

さらに本研究では、バウムテストで「自信」の表れとされる、「幹の太さ(指3本以上)」、「幹の線引き(一本線)」、「短い幹・大きな冠部(幹に対する冠部の比率)」の3項目を分析した。また、「上縁はみ出し」、「幹下縁立」、「枝あり」の3項目については、中島ら³⁾の劇団員を対象とした先行研究のデータとの比較として、分析項目に追加した。日本女子剣道トップ選手群と女子大学生剣道選手群の両群間で「幹の線の引き方」、「短い幹・大きな冠部」で有意差がみられた。また、「上縁はみ出し」、「幹下縁立」、「枝あり」の3項目を日本女子剣道トップ選手群・女子大学生剣道選手群・劇団員群の3群、および女子大学生剣道選手群と劇団員群の両群で、すべての項目において有意差がみられた。さらに、日本女子剣道トップ選手群と劇団員群では「上縁はみ出し」にのみ有意差がみられた。

劇団員においては、中島ら⁵⁾の報告によると、非日常の世界を舞台上で生み出す、いわば枠にとらわれず、自由に自分を表現する能力を有する集団であるため、描かれたバウムからも枠にはめ込まれない、「上縁はみ出し」や「幹下縁立」が多くみられた。一方で、剣道は決められた枠の中で自分を律することで、精神鍛錬の向上を目指す競技である。そのため、特に日本女子剣道トップ選手群においては、「上縁はみ出し」や「幹下縁立」を描いたものはみられなかった。しかしながら、女子剣道トップ選手は画用紙いっぱいエネルギーッシュなバウムを表現しており、枠の中で堂々たるバウムを描いている印象が強く、そのことは女子剣道トップ選手の心理特徴として考えられる。

【参考文献】

- 1) 徳永幹雄:T.T式メンタルトレーニングの進め方(改訂版)ー動きを直せば、心は変わるー,トーヨーフィジカル,p2,2015.
- 2) カール-コッホ:バウムテスト第3版,誠信書房,2015.
- 3) 植田忠生,福本修二,吉田恭将,石手靖,望月康司,大嶽真人:剣道における心理的競技能力検査について,慶応義塾大学体育研究所紀要,44-1,pp25-33,2005.
- 4) 徳永幹雄,吉田英治,重枝武司,東健二,稲富勉,斉藤学:スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差、競技レベル差、種目差、健康科学,22,pp109-12,2000.
- 5) 中島郁子,佐渡忠洋,古谷学:劇団員のバウム表現について,日本心理臨床学会第34回大会発表論文集,2015.

ハーフコート・ディフェンスのポジショニングに対する考え方の因子分析的研究

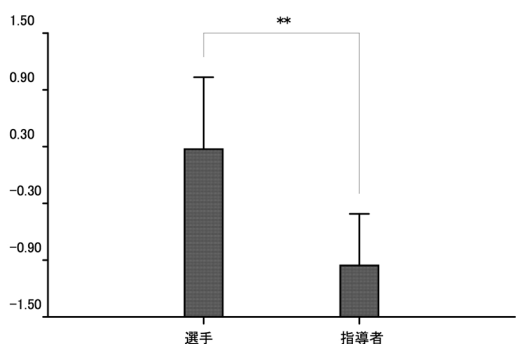
川面剛（九州共立大学），青柳領（福岡大学）

【緒言】バスケットボールのハーフコートでのポジショニングに関しては誰もが認める望ましいポジショニングとまずいポジショニングがある反面，コーチや監督の価値観，身体的特徴，運動能力の差などから必ずしも「望ましいポジショニング」が一意に決まらない場合もある．例えば，ノーマークにもかかわらずゴール下のディフェンスの身長が高ければブロックショットが可能になるため身長の高さがディフェンスの評価に影響することが考えられる．また，ピックアンドロールのように男子にのみ頻繁に見られるプレイではその状況を女子が把握できないので致命的な状況にはならない場合もある．このように身長などの身体的特性やプレイの使う頻度に差がある場合にはポジショニングに対する戦術的な評価に差があると考えられる．使われるプレイの頻度に差があるポジジョン間でもハーフコート・ディフェンスのポジショニングに対する戦術的な考え方に違いが見られると思われる．そこで，本研究はポジジョン間のハーフコート・ディフェンスのポジショニングに対する戦術的な考え方の差違について類似した判断傾向を因子として抽出し，その因子の性差，ポジジョン，指導者と選手との関連について検討した．

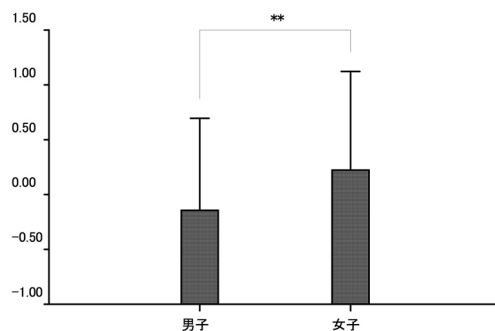
【研究方法】対象者は九州学生バスケットボール連盟 1 部と 2 部に加盟している選手の計 192 名（男子 110 名，女子 82 名）と社会人指導者 53 名（男子 39 名，女子 14 名）の計 245 名である．ポジショニングの評価を行う項目は，カットインプレイ 3 項目（1.ストレート・カット，2.ステップとフロント・カット，3.バック・カット），オンボールスクリーン 5 項目（4.ドライブ・ツー・ザ・ゴール，5.カット・アウェイ，6.アーリー・リリース，7.オープン・ショット，9.ジャンプ・ショット），オフボールスクリーン 7 項目（8.バックドアプレイ，10.カット・イン，11.カット・アウト，12.アウト・イン，13.ダブル・ロー・ポスト，18.バック・スクリーン，22. アウト・サイド・スクリーン），ドリブルスクリーン 3 項目（14.ドリブル・ツー・ザ・ゴール，19.カット・アウェイ，20.ジャンプ・ショット），アウトサイドスクリーン 4 項目（15.カット・アウェイ，16.ポップ・アウト，17.スクリーン・アンド・ジャンプショット，21.ドライブ・ツー・ザ・ゴール）の計 22 項目である．調査の趣旨を説明した後，学校別に指導者にアンケート用紙を配布し，後日郵送してもらった．調査は当該プレイの開始前とプレイ後のオフenseとディフェンスのポジショニングの様子を図示した用紙にそのディフェンスの評価をディフェンス側から見て 5 段階で評価してもらった．評価得点に因子分析を行い，ポジショニングに対する評価の因子構造を抽出し，得られた因子得点を性別，ポジジョン別，選手か指導者かに集計し，平均値の差を分散分析および多重比較検定により検定した．

【結果および考察】当初の因子分析では固有値 1 以上の因子は 5 因子得られたが，第 5 因子は有意な因子負荷量を持つ項目が 1 つであったため，4 因子による解を求め，バリマックス基準による直交回転を行った．結果，第 1 因子には項目 3, 4, 11, 12, 13, 16, 18, 19, 20, 21, 22(項目名は研究方法を参照)が有意な因子負荷量を示し，「ディナイポジジョンに関する状況ミス」因子と解釈した．同様に，第 2 因子は項目 5, 6, 7, 9, 10, 15, 16, 17 に有意な因子負荷量を示したので「オンボールスクリーンに関するポジショニングに関する状況ミス」

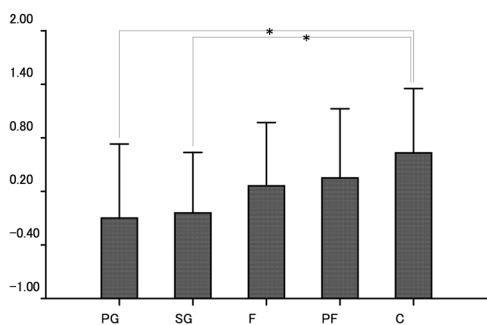
因子, 第3因子は項目 1, 11, 12, 13, 14 に有意な因子負荷量を示し, 「ヘルプポジションに関する状況ミス」因子, 第4因子は項目 1, 2, 4 に有意な因子負荷量を示したので「ボールマンポジションに関する状況ミス」因子と解釈した. さらに, これら4因子と性, ポジション, 選手か指導者か別にその平均値の差を検定した結果, 性とは第1因子(因子名は上記参照)で有意な差があり, 男子の方が厳しい評価であった. ポジションとは第1因子と第3因子に有意差があり, 多重比較検定の結果, 第1因子はポイントガードとセンター, セカンドガードとセンターに有意差があり, いずれもセンターの評価が甘かった. また, 第3因子はパワーフォワードとシューティングフワード, センターとシューティングフワードに有意差があり, いずれもシューティングフワードの方が厳しかった. また, 選手と指導者との間では第1因子, 第2因子, 第4因子に有意差がみられ, 第1因子と第4因子では指導者が, 第2因子では選手の方が厳しい評価であった.



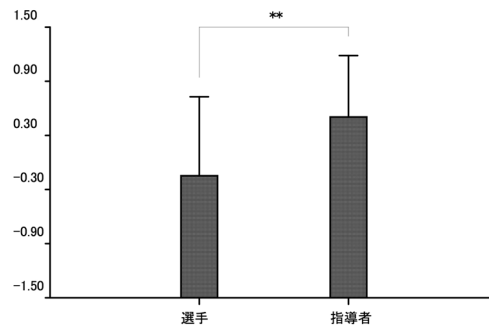
ダイナミックポジションに関する状況ミス因子の選手と指導者間差



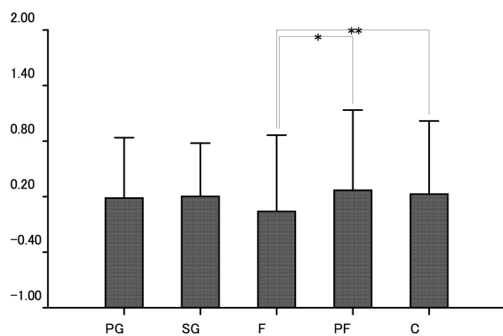
ダイナミックポジションに関する状況ミス因子の性差



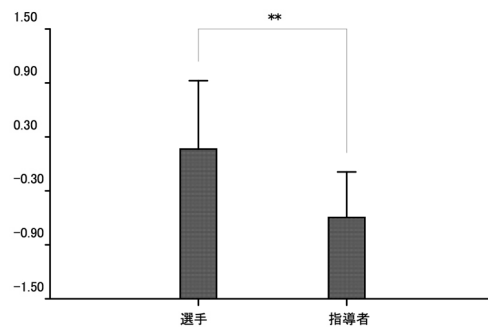
ダイナミックポジションに関する状況ミスに関する状況ミス因子のポジション間差



オンボールスクリーンに関する状況ミス因子の選手と指導者間差



ヘルプポジションに関する状況ミスに関する状況ミス因子のポジション間差



ボールマンポジションに関する状況ミス因子の選手と指導者間差

大学体育における学修内容の再検討

金谷麻理子, 高木英樹 (筑波大学体育系)

1. はじめに

わが国における大学の教養科目の体育（以下、大学体育。）は、戦後の教育改革以降長きに渡り、教養教育の中核的な科目として位置づけられており、大学設置基準の大綱化によって「4単位必修」というしほりがなくなった現在においても、必修または選択科目として数多くの大学で実施されている。また、近年では学生のメンタルヘルスの改善や新入生の環境適応などにも効果的であるとされ、新たな価値が見い出されてきている。

一方、大学教育のあり方を検討する場では、大学体育が本当に必要な科目か、否かという議論が継続して行われきたのも事実である。杉山（2001）によると、この議論は、専門分野を学ぶことが主な目的となる大学において「保健体育科目の意義」が揺れ動くたびに不要論がまき起こってきたという。しかしその都度、体育スポーツの関連団体やそれを専門とする研究者の提言や活動によって、大学体育の存在意義が再認識され、何とか現状に至っているともいえる。また、現在の大学体育は、各大学の教育理念やカリキュラム、体育施設の保有状況、学生のニーズなどによって、授業形態や教育内容がますます多様化しており、担当教員の人数や施設の維持管理の問題などを理由に実施規模の縮小を検討する大学もある（森田，2016）。さらには、大学そのものも2018年の大学全入時代をひかえ、2020年から順次行われる大学入試センター試験改革やそれに伴うカリキュラムの再構築など、大規模な制度改革が本格化し、まさに大混乱期を迎えている。したがって、大学体育のあり方が各大学の方針に委ねられている昨今、いつ再び大学体育の是非が問われる事態が生じてもおかしくない状況にあると考えられる。

そこで、本研究では、このような大学体育を取り巻く状況を踏まえた上で、科目としての体育の独自性に着目し、大学体育の学修内容について再検討することによって大学体育の普遍的な存在意義の確立に役立つ資料となることを目的とする。

2. 方法

まず、関連文献に基づいて、学校教育における体育と大学体育の教育目標を再確認し、批判的検討を加えることによって現在の体育のあり方を把握する。そして、その結果を踏まえて、体育の独自性についてスポーツ運動学的観点から考察し、今後の大学体育に相応しい学修内容の提案を試みる。

3. 現在の体育のあり方

学校教育における体育については、中央教育審議会情報および学習指導要領等に基づいて、大学体育については社団法人全国大学体育連合が公表している情報および大学体育のあり方に関する先行研究に基づいて、それぞれ体育で目指すべき内容を再確認した。そし

て、双方のねらいを照らし合わせた結果、ほぼ同様の内容、すなわちいずれも「健康」、
「体力」、「生涯スポーツ」および「人間性の形成」がキーワードとなる知識や技能の養成が
目指されているということが明らかになった。つまり、学校教育における体育と大学
体育は異なる枠組みでカリキュラムが成立しているが、やはり体育という科目である以上
その学習内容に大差なく、さらにこの種の能力養成は年齢に左右されるものではない学び
続ける価値があるものと考えられる。

一方で、「健康」、「体力」、「生涯スポーツ」、そして「人間性の形成」という体育
の目標は、それぞれ最大限の学習効果をあげようとするならば、体育授業でなくてもよい
のではないかという見方もある（森田，2016）。例えば、健康や体力の維持、増進を主な
目的とするならば、大学の授業でなくともスポーツクラブに通えばいいのではないか、指
導者は体育教員でなくてもよいのではないかという問題提起がある。すなわち、このよう
な観点からそれぞれのキーワードを検討すると、これらは必ずしも体育の独自性を示して
いるとは言えず、現状の体育は生理学的な能力向上や徳育、あるいは生涯学習に向けてな
ど、教育効果の一端を担っている要因の寄せ集めによって存在意義が示されていると考え
られる。

4. 大学体育における学修内容の再検討

ここでは、上記を踏まえ体育の独自性について考察し、今後の大学体育の学修内容につ
いて検討した。スポーツの運動は、学習活動を通して習得されるが、その習得された運動
課題がうまくなってさらに習熟度が増していくと、そのやり方の意識は学習者の受動地平
に沈んでしまい、特に意識しなくてもできるようになる。すなわち、運動学習では、やろ
うと思っただけでできるという無意識的に運動課題を達成する能力が獲得されていくのであ
る。金子（2002）は、この匿名的な運動課題の達成能力を身体知とよび、この知の獲得と
伝承こそが体育の主な目的であるとしている。さらに、人間の運動学習プロセスには 5 段
階の学習位相が存在するという。この学習位相に、学童期から青年期に至るまで継続して
学ぶ体育の学修内容を当てはめると、大学生世代では、それまでの体育で積み上げてきた
身体知に基づいて、できるようになったものをさらに洗練させていくという図式化位相か
ら自在位相に至る段階を経験することが可能になるのである。この段階は、運動の質を高
めることが主な目標となるため、まさしく高等教育に相応しい学修内容であるといえる。

以下、詳細については当日発表する。

<参考文献>

- ・金子明友（2002），わざの伝承，明和出版。
- ・森田 啓・引原有輝・若林 斉・金田晃一・西林賢武（2016），学士課程教育における
大学体育：その可能性と再定義，体育学研究，第 61 号，pp. 217-227.
- ・杉山進，小林勝法，奈良雅之（2001），大学体育の現状と課題，体育・スポーツ哲学研究，
第 23 号-2，pp. 1-15